

青少年教育に関する基盤的及び課題別の調査研究を行い、その成果を広く提供・活用することにより青少年教育の振興を図っています。

調査及び研究

青少年及び青少年教育に関する情報を収集・分析し、統計資料の作成や青少年教育関係文献のデータベースの構築を行うなど、基盤的及び課題別の調査研究を計画的かつ継続的に実施しています。

成果の提供

調査研究や教育事業等の成果をまとめた報告書等を発行し、全国の青少年教育関係機関・団体等に配布しています。また、これらの情報はホームページからも閲覧することができます。

●インターネット等による提供

①青少年教育情報センター所蔵資料等検索サービス

当機構が発行した調査研究報告書や研究紀要等の全文データ等を含めサイト上で閲覧、ダウンロードできます。



②YouTubeチャンネル

青少年教育研究センターが実施したオンラインイベントのアーカイブ等を公開しています。



③Facebookページ

最新の調査結果や青少年教育研究センター関連のイベント情報等を発信しています。



1 国立青少年教育施設における傷病の概況(令和4年度調査)

毎年度国立青少年教育施設で発生した傷病や事故の状況を把握し、その傾向や要因を検証して、施設の安全性の改善や安全対策の充実に資することを目的とした調査を行っています。

調査結果を教育現場での安全意識の向上につなげてもらうため、指導者用のチラシを作成し、利用団体に配布して啓発しているほか、当機構のHPで公開しています。

●安全は楽しい活動の第一歩(令和5年度作成)より



指導者用チラシ
ダウンロード

<https://www.niye.go.jp/wp-content/uploads/2024/04/anzen2024.pdf>

2 青少年の体験活動等に関する意識調査

青少年の自然体験や生活体験等の実施状況や日々の生活習慣の実態、自立に関する意識等について、全国規模の調査を平成18年度から実施しています。

● 主な調査結果(「青少年の体験活動等に関する意識調査(令和4年度調査)」報告書(令和6年3月)より)

- ① 放課後や休日に、保護者が子供に活動的な過ごし方を希望しているのに対して、青少年は家でゆっくりできる過ごし方を希望する傾向がみられる。
- ② 世帯年収200万円未満と1,200万円以上の両方で、青少年の放課後や休日の過ごし方の満足感が低い傾向がみられる。
- ③ 青少年は、保護者や自身が希望するほどの体験ができていない。
- ④ 令和元年と比べると、コロナ禍を経て、青少年の体験活動が減少している。
- ⑤ 「あの人のようになりたい」と思う大人は有名人が4割程度で最も多い。なりたと思う大人がいないという割合は、学年が上がるにつれて増加し、高校生では3割程度となっている。

＼ここに注目しました／

青少年は、保護者や自身が希望するほどの体験ができていません。

小学生には1年間の学校外での体験活動として「実際にしたこと」を、その保護者には1年間の学校外での体験活動として子供に「してほしいこと」をそれぞれ尋ねて回答の比較を行いました。小学生の保護者が「とてもしてほしい」または「少ししてほしい」と回答した割合は13項目のうち12項目で9割以上であり、各質問に「してほしい」と答えた割合も1割未満でした。

中学生と高校生に対して、1年間の学校外での体験活動として「実際にしたこと」と「したいこと」を尋ねて回答の比較を行いました。「農業や林業、漁業での勤労や生産を体験すること」、「商店(お店)や会社などで実際の職業を体験すること」、「外国の人と話したり、遊んだり、一緒に生活したりすること」は、体験の希望と実際の体験活動の実施との差が大きいという実態が分かりました。



報告書

<https://koueki.net/user/niye/110376019-1zentai.pdf>



概要

https://koueki.net/user/niye/110376019-1gaiyou_r4ishikichousa.pdf

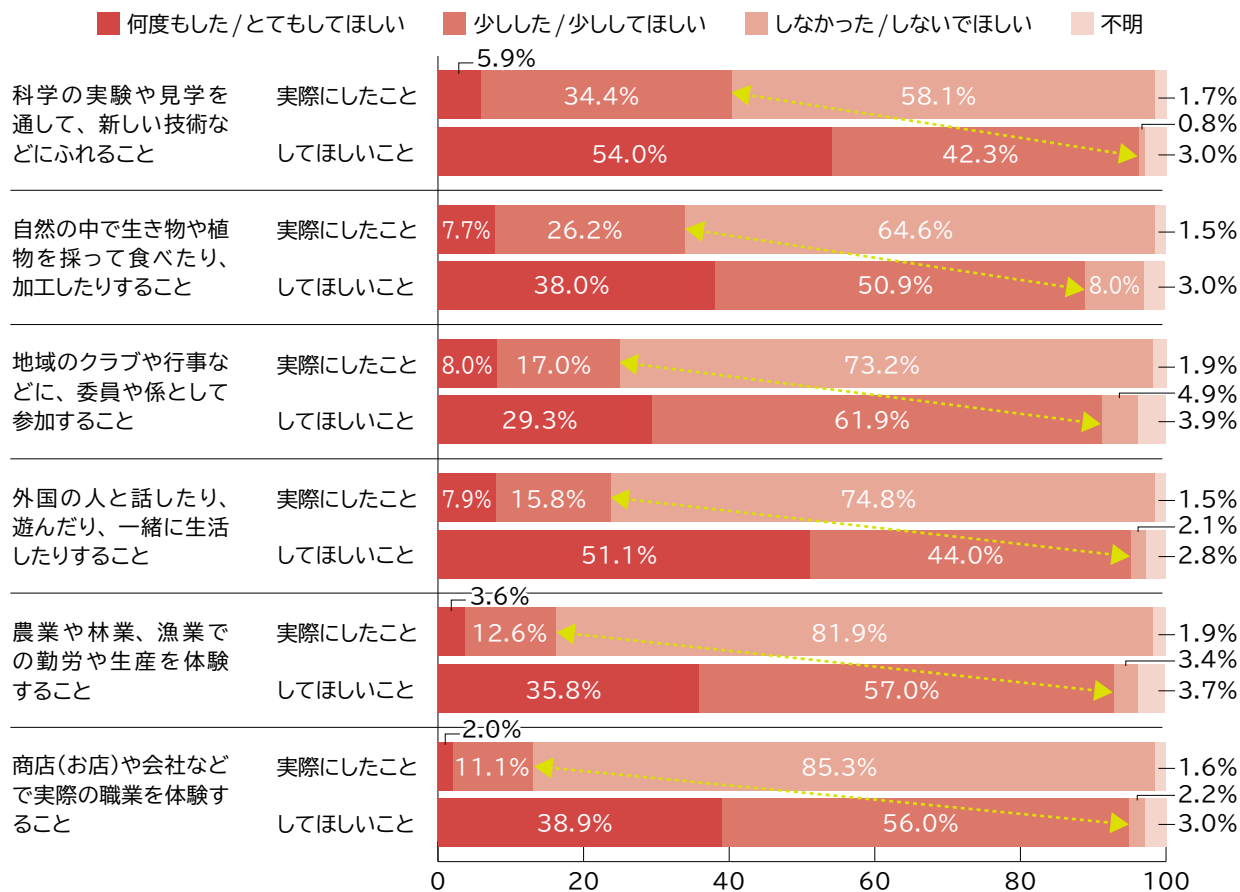


図1 1年間の学校外での体験活動(実際にしたこと、してほしいこと)(小学生の保護者) ※差の大きな項目を抜粋

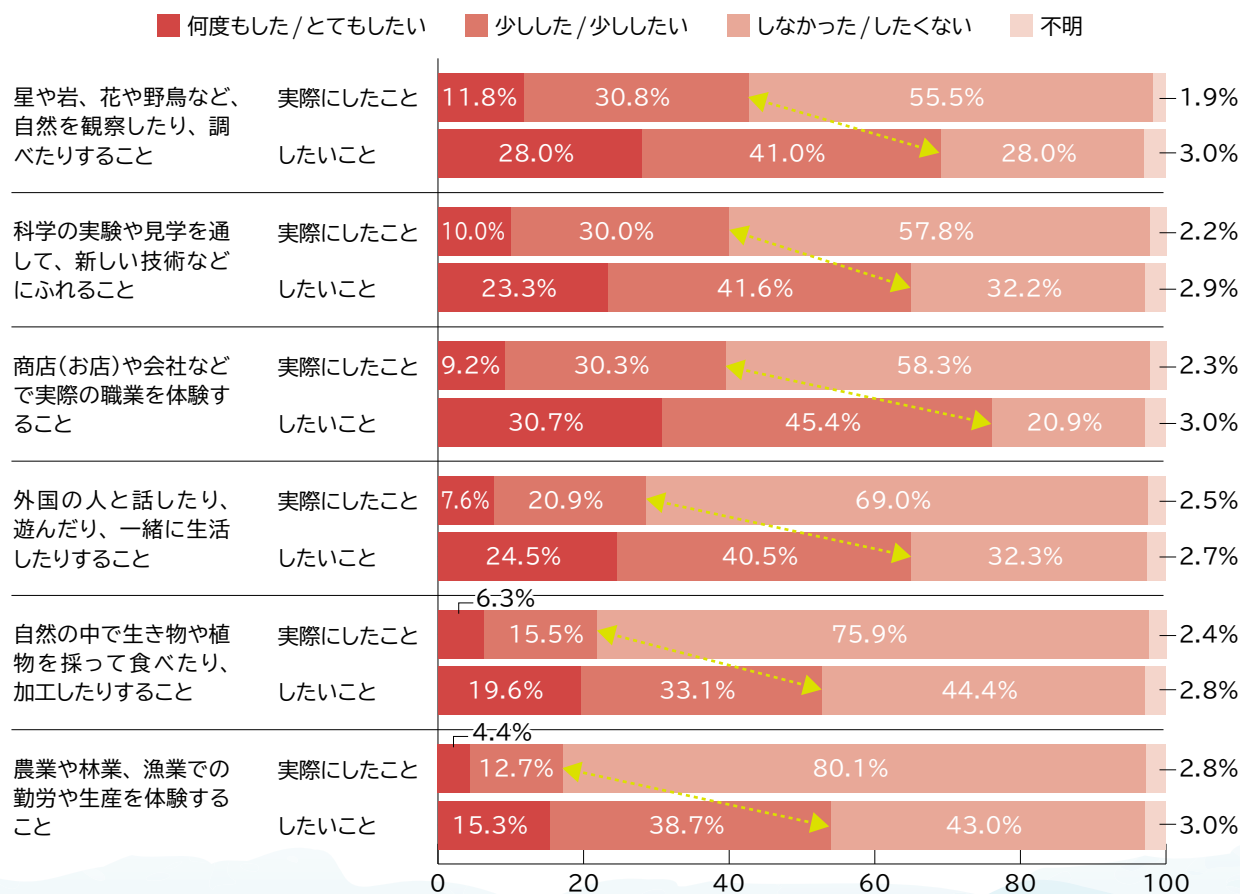


図2 1年間の学校外での体験活動(実際にしたこと、したいこと)(中2、高2) ※差の大きな項目を抜粋

3 高校生の進路と職業意識に関する調査 —日本・米国・中国・韓国の比較—

毎年度テーマを設定し、その意識や実態を把握することを目的とした高校生対象の調査を米国、中国、韓国、日本で同時に行い、日本の高校生の特徴や課題を分析しています。令和5年度のテーマは、「高校生の進路と職業意識」で、日本の高校生の主な特徴として次の5つがあげられることが分かりました。

● 主な調査結果(「高校生の進路と職業意識に関する調査報告書—日本・米国・中国・韓国の比較—(令和5年6月発行)」より)

- ① 進路にかかわる活動への関心が高く、学習も行われているが、実際の体験が少ない。
- ② 「仕事」「働くこと」のイメージは「生活のため」「社会人としての義務」が強い。
- ③ 職業選びにあたって、「仕事の環境」「安定性」「自分の興味や好みに合っている」を重視している。
- ④ 10年前と比較して、「暮らしていける収入があればのんびりと暮らしていきたい」「仕事よりも、自分の趣味や自由な時間を大切にしたい」と考えている割合が上昇している。
- ⑤ 今の生活に満足しているが、将来への不安が強い。

＼ここに注目しました／

日本の高校生は、進路にかかわる活動への関心が高く、学習も行われているが、実際の体験が少ない。

日本の高校生は、「職業の種類や内容」「進路選択の方法」を「学習したことがある」と回答した割合が8割強となっており、米中韓を大きく上回っています。また、「職業の見学」「就業体験」に関心があると回答した割合が6割以上と高いですが、それらの「取組をしている」と回答した割合は、いずれも約1割と最も低いです。

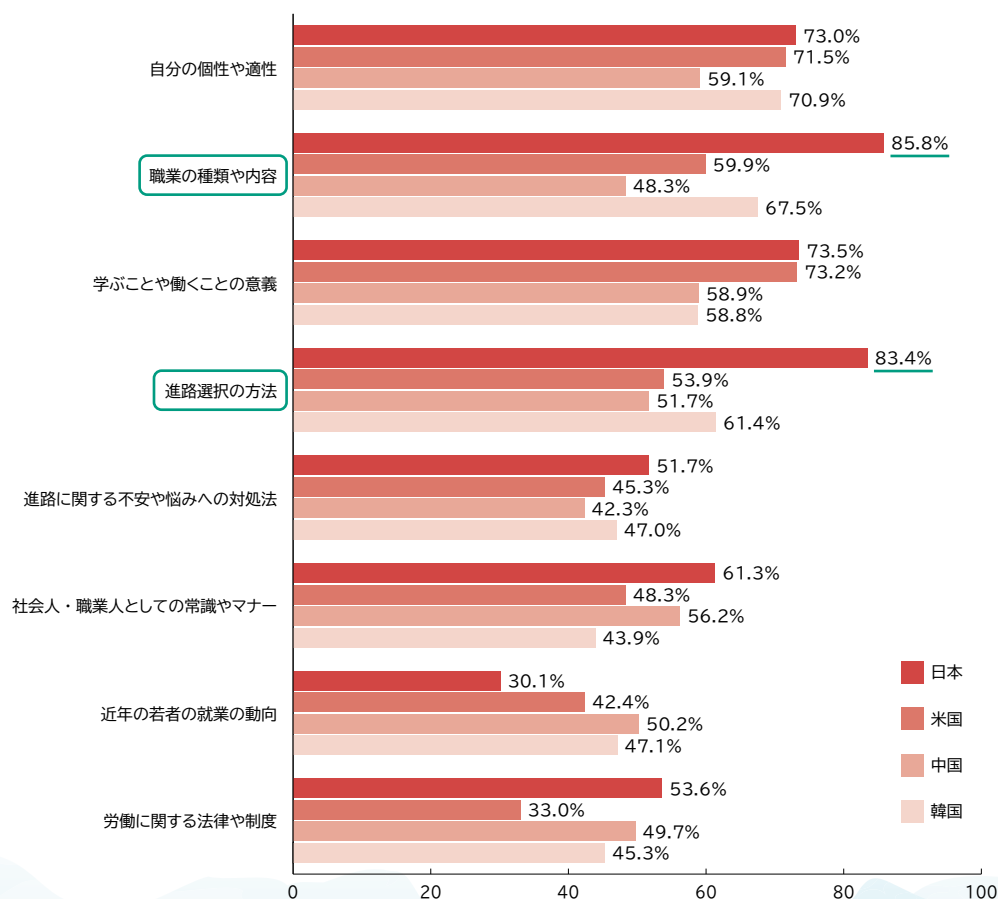


図1 将来の生き方や進路についての学習(「学習したことがある」と回答した割合)

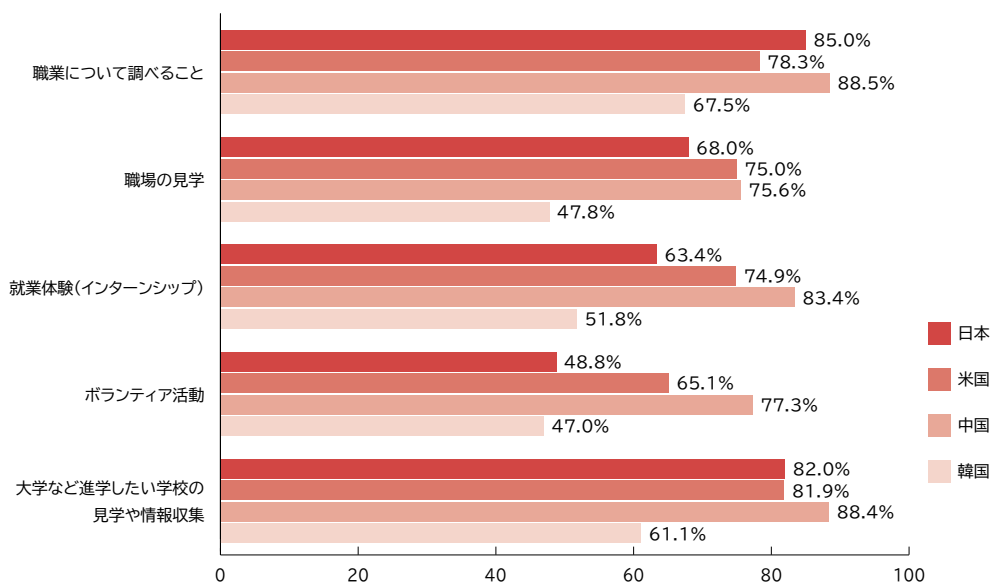


図2 将来の生き方や進路にかかわる活動への関心(「関心がある」と回答した割合)

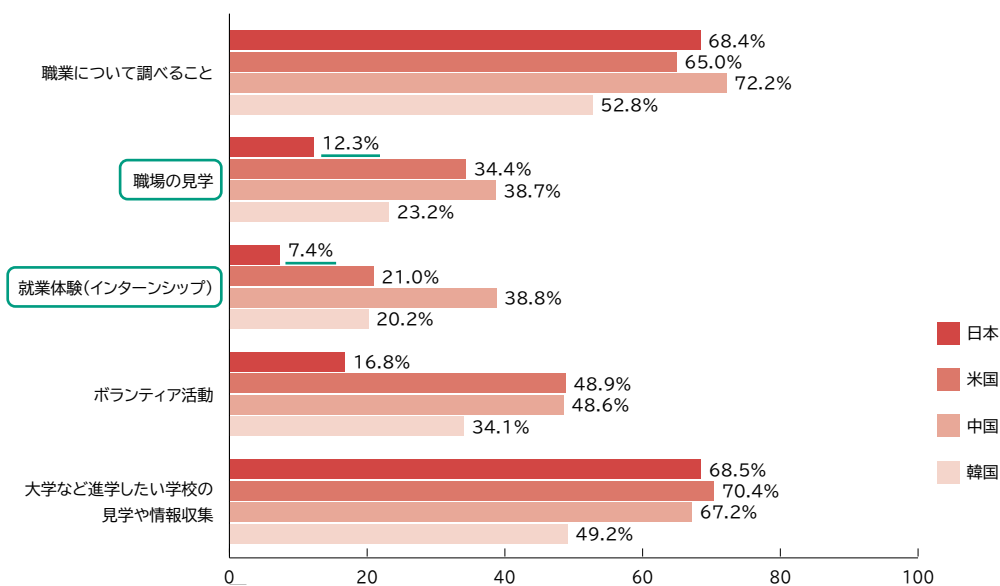


図3 将来の生き方や進路にかかわる活動への取組(「取組をしている」と回答した割合)



報告書

<https://koueki.net/user/niye/110373404-1zentai.pdf>



概要

<https://koueki.net/user/niye/110373404-1gaiyou.pdf>